



7

2004 July  
No.75

## CONTENTS

- ◆求ム！不良中年(あるいは不良老人)ー第3回エコストックへのお誘いー
- ◆旅日記 海と川 (その2)東北地方の河川
- ◆天然アユの大量遡上と山村振興
- ◆今月の調査風景
- ◆今月の一枚
- ◆編集後記

URL <http://www.hm.aitai.ne.jp/~yahagi/>

まい!

## 不良中年

(あるいは不良老人)

ー第3回エコストックへのお誘いー

石原 紀彦

矢作川の隣の流域に当たる庄内川、その河原で今年も「ECOSTOCK on 水辺」が開催される。このエコストック、そもそもは1990年代の愛知県を代表する環境問題の現場であった「海上の森」と「藤前干潟」とが矢田川・庄内川でつながっているので、「だったら、歩いて交流しようよ」と、2000年に「万歩く」という企画を実施したことさかのぼる。海上の森と藤前干潟の両方から歩き出し、中間点で合流するという企画。そこで多くの人々が各地でエコなことを考え、エコな活動を行っていることがわかった。しかも話を聞くと、「真似をしたくなるほどおもしろそう」なのである。それだけおもしろいことが行われていることを知ったからには、「話を聞くだけではもったいない、みんなでエコをもっといっぱい集めたらもっと楽しいはずだ」ということになった。みんなでエコをいっぱい集めてストックする、それがエコストックである。

エコストックは、2002年は庄内緑地公園、2003年は矢田川と庄内川との合流地点である水分橋緑地で開催した。そして、「環境に負荷をかけない」、「す

べては人力で行う」などの原則に基づき、市民の手で会場を造りあげ、いろんなアイデアを実現した。川の両岸を使うので「どうせなら自力で橋を架けよう」と盛り上がるも、法律では川に勝手に橋を架けてはいけないことになっている。でもそんなことはあきらめない。「橋は架けちゃだめでも、水上にオブジェをつくって表現するのはいいんだよね」って、どこから見ても橋にしか見えない水上オブジェができてしまった。エコをあつめたエコ路地では、大量の竹を組んでドームやブースをつくった。人力遊園地では、竹製のジェットコースター、鉄工所が廃材を利用してつくったリユース遊具、挙げ句の果てにはどこから持ってきたのか空港で飛行機を引っ張るトラクターを改造した花車を走らせてしまった。

こうなると、子どもたちは放っておいても川に入って遊び出す。水上オブジェで結ばれた両岸、川の中、所かまわず走り回る。スタッフは「タチの悪いガキども」に悩まされることになるはずだが、結構平気な顔をしている。何のことではない、どこから見ても橋にしか見えない水上オブジェをつくってのける「不良中年」やじいさま／ばあさまたちがスタッフをやっているのだ。しかも、彼らは悪ガキどもとはキャラリアが違う。

過去2回、エコストックをやってみてわかったことは「子どもたちが遊べる川を取り戻す」ためには、「子どもの前に俺たちを遊ばせろ」と主張する「不



良中年」たちが必要だということだ。実際、エコストックで河原をジャックしたら、どこからともなく遊び好きの「不良中年」たちが湧いて出てきた。そして、口では「子どもたちを川で遊ばせる」と言いつながら、最も遊んでいたのは彼ら自身なのだ。「不良中年」たちは準備と称して1週間も河原で遊んでいたのである。しかし、そうして遊ぶことによって、「川のどこが危ないのか」、「川のどこでどの程度のことができるのか」の情報を集め、危険を予測し、子どもたちを遊ばせる際のリスクをコントロールしている。これは「不良中年」だからできる芸当だ。

そういえば、豊田市役所のある職員は、「児ノ口公園を改修する際、市が小川沿いにビオトープをつくったら、それがいつの間にか田んぼになっていた」と教えてくれた。これは豊田市に住む「悪ガキがそのまま歳をとったじいさま」たちの仕業だという。どこの地域でも「不良中年」はちゃんと存在していて、おもしろく楽しい悪だくみのアイデアを実現させる機会をうかがっているのである。

だとすれば、庄内川だけでエコストックを行う理由はどこにもない。矢作川にも豊川にも、全国各地の川にもエコストックを広げてしまおう。各地の川

での楽しい悪だくみを教え合い、お互いにおもしろい悪だくみを競い合うことで、日本中に市民の場所を創っていく。そういうわけで、「我こそは矢作川を楽しい川にする『不良中年』である」という方々にも、あるいは「楽しい矢作川にしてほしい」と願っている方々にも、是非とも今年のエコストックに参加して頂きたいと思っています。「我こそは」という方々をお待ちしております。



### 第3回エコストック on 水辺

開催日：2004年9月25日(土)～26日(日)

(その前から準備のため河原で  
遊んでます。こちらの参加も歓迎)

場 所：名古屋市北区水分橋緑地

(地下鉄上飯田駅より徒歩15分)

連絡先：〒460-0011 名古屋市中区大須2-26-28

アイランド大須1F だれでも万博協会内  
エコストック実行委員会

tel.052-222-4311/fax.052-222-4318

Mail:ecostock2004@yahoo.co.jp

(いしはら かずひこ、

「第3回 ECOSTOCK on 水辺」実行委員会事務局)



先日玉川温泉へ旅しました時、東北、秋田新幹線を利用して、田沢湖までの間、車窓から見た川の状態について述べることにします。あまりにもスピードが速いため川の名称が読みとれないところもありました。川面を見れば、材木舟が行き来していた藩政時代の風景がしのばれます。

満々と水をたたえて悠々として流れている北上川。大きく蛇行しているためか、いくたびか新幹線が横断しております。比較的低い堤防は草木で覆われ、水面に影を映しています。豊富なエサ、身を守る樹木が多いのか、小鳥たちが自由に飛びかっています。水中にはどんな生き物が棲んでいるのか興味津々です。北上駅の近くでは複断面となっておりますが、高水敷にも草、木が生えており、川全体が水と緑の感じさえします。

仙台駅の少し西、新幹線を横断するように名取川が流れています。築堤、複断面構造の大河川で、水量はさほど多くなく、堤防、高水敷、中洲には草木が生えています。

仙台駅に到着する直前に広瀬川を渡ります。上流側

には住宅地が密集しているためか、石積やブロック積の比較的高さのある護岸となっております。岸から適度に洲が発達しており、草や花が咲き、断面を和らげておりました。下流側は、土地に余裕があるためか築堤、複断面方式で、低水路の岸は寄せ石などで法先の洗掘防止を図っています。河川空間の利用はこれからです。

古川駅付近を流れる鳴瀬川。築堤方式の大河川ですが、木は生えておりません。堤防の草はきれいで刈り取られ、他に比べると少し過保護のようにも見受けられました。

盛岡駅付近の川は水衝部が張ブロックで補強してありますが、適度な長さで洲がついて、草木が生えているために、和らげる効果は十分ありました。

那須塩原駅付近の川は、流水がほとんどなく、干上がったところもありました。周辺は田植が終わり、殆どの水を農業用水として取水されたものと思われます。これも米どころのせいでしょうか。

東北地方の河川断面は、一般的に川幅を広くとり、水深の浅い堤防が多いように見受けられました。

一方、矢作川を渡る時に見られる景色はと言いますと、上・下流とも堤防から洲まで草木、竹等が繁っており、緑は十分だと思いますが、水量の少なさが目立ち、残念ながら水と緑で一杯の川というイメージではありません。しかし、他の河川と比べて、断面構造もよく将来が楽しみです。

(まつたけ よしさと、豊田市矢作川研究所 顧問)

# 天然アユの大量遡上と山村振興

新見 幾男

今年の春の連休中に、大量の天然アユが明治用水頭首工を越えた。豊田市矢作川研究所の調査によると、連休の前後も含め、左岸魚道の遡上量は約220万尾だった。右岸魚道では遡上量調査は行われなかったが、私たちの直感的目測では、右岸魚道の遡上量は左岸魚道の1~2割程度だったと思う。左右岸合わせて、250万尾程度の遡上があったのではないか。

近年では6年前の1998年に、約335万尾が同頭首工を越えたが、この年の遡上アユは魚体が小さかった。1尾5~10g級のアユが中心だった記憶だ。夏のアユ漁の大豊漁にはつながらなかった。

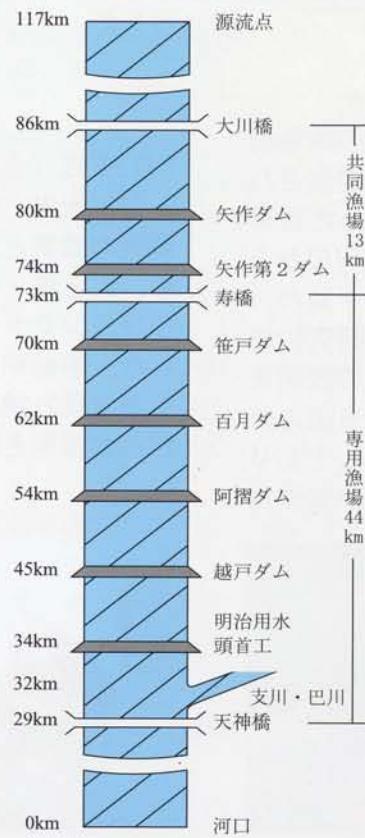
今年の遡上アユは、魚体が大きかった。4月29日には1尾15~20gの粒ぞろいの大型アユが、1日で10万尾余のぼった。その後は次第に小型化していったが、連休明けの遡上にも大型アユが随分とまじっていた。

右の地図を見ながら読んでほしいが、4月29日に明治用水頭首工を越えた大型アユは、3日後に越戸ダム魚道を大挙して遡上した。阿摺ダムの魚道も越えた。越戸ダムと阿摺ダムでは、漁協が遡上量調査をした。越戸ダム50万尾、阿摺ダム7万尾程度だったと思う。

その上流の百月ダム魚道では遡上量調査は行われなかったが、5月19日、遡上アユの先陣と見られる大型アユの群れが同魚道を遡上していた。更に上流の笹戸ダムは坊主堰堤式の小型ダムであり、天然アユはここも難なく越えたものと想像している。矢作川漁協の専用魚道44km区間の全域に、三河湾から遡上してきた天然アユが拡がったようだ。これより上流の矢作第2ダム、矢作ダムには魚道がない。

前述のように、今年の天然アユの魚体は大きく、遊泳力があった。しかも今年は河川流量がアユの遡上期間中を通して、きわめて豊富だった。しかも、濁流の大増水に至るような洪水がなかった。遡上数が多くたこと、魚体が大きしたこと、流況が良かったこと、の3条件が重なって、今年の天然アユは矢作川漁協の漁場全体に拡がることができた。

大ざっぱにいって、河口から54km地点の阿摺ダムから下流域が豊田市である。同ダムより上流域は西加茂郡及び東加茂郡の山間町村である。この山間町村の漁協組合員も住民も、漁協役員が「天然アユ復活」を語っても、あれは漁協役員の「ホラ」位にしか思っていなかった。近年の放流アユの不漁対策としても「天



然アユ」は考えられていなかった。

今年のように天然アユ遡上の当たり年でも、アユはダム群の上流と下流に平等に拡がってくれた訳ではなかった。前述の阿摺ダムから下流の豊田市内の矢作川では、アユは「過密」状態になった。同ダム上流の西加茂郡・東加茂郡の矢作川は、天然アユ群の先頭が届いたというものの、やはり「過疎」状態である。天然アユの数も人口に似ていて、都市部は過密、山村部は過疎なのである。

この過疎・過密問題を解決するため、矢作川漁協は、河口から12km地点（安城市・藤井堰）と34km地点（豊田市・明治用水頭首工）で天然アユを捕獲し、漁協の水槽車を繰り出して山村部の矢作川へ運んだ。この搬送放流は天然アユ遡上の終盤からだったので、搬送は数万尾の規模にとどまったが、山村の人々から熱烈に歓迎された。何よりも「三河湾からのぼってくるアユ」への関心を高めた。

河川流域には、国規模の大経済とは別のミニ経済圏がある。天然アユがのぼって来ると、旅館や飲食店、喫茶店などのミニ経済が活気づく。まだアユ解禁（6月12日）の前だが、天然アユが盛んに餌を食み、矢作川の全川で川底が輝いてきた。豊漁を予感し、人々は浮かれ、ミニ経済も大きな期待をよせている。天然アユは山村の振興に役立ちそうである。矢作川漁協としては、こうした期待を背にして、天然アユの産卵場保護、三河湾浄化、水源の森の保全に着手する事業計画を固めている。（解禁9日前の夜に記）

（にいみ いくお、矢作川漁業協同組合長、  
豊田市矢作川研究所幹事、週刊ローカル紙・矢作新報社主）

## 今月の 調査風景

5月22日（土）

応用生態工学研究会の現地説明会が矢作川において開催されました。全国から集まった総勢40名余りの参加者は、河口から16km付近（安城市）を訪ね、名古屋大学大学院工学研究科の戸田講師より河川形状の説明を受けました。当日は数日前の降雨によって大幅に増水しており、通常の河川流量が乏しい矢作川



を参加者に見ていただくことができなかったのが残念です。その後、豊田市内の古川辺公園に移動して中流域の視察も行いました。

（山本）

5月28日（金）

香川大学との共同研究で、知多湾の底質と水質を調査するため、泥と底・中・表層の水およびプランクトンの採集を行いました。午前中のなぎから一変し、午後は荒れ模様。何度も転びながらの採集となりました。

（吉鶴）



5月30日（日）

27日に標識付けしたアユの健康状態を確認後、矢作川に放流しました。川に元気に戻っていく姿を見ながら、調査の成功を祈る気持ちと旅立たせる淋しさが交錯していました。

（吉鶴）



## 今月の一枚



（名鉄三河線 三河広瀬駅より 2001年7月3日 小川都 撮影）  
(2004.3廃線)

## 編集後記

慣れないことも多い中の月報編集でした。全く満足がいくというものではありませんでしたが、無事間に合いました。ご協力を頂いた皆様、ありがとうございました。

次回は、研究所創立10周年の記念号となります。お楽しみに！

（高橋サ）

豊田市矢作川研究所

〒471-0025  
愛知県豊田市西町2-19 豊田市職員会館1F  
TEL 0565-34-6860 FAX 0565-34-6028  
E-mail yahagi@hm.aitai.ne.jp

Rioは再生紙(100%)を使用しています。